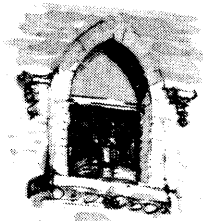


— 児童発達教育学 — を読んで



児 玉 省

一九六八―一九六九年にかけて来日し、お茶の水女子大学で招聘教授として授業をしたデル・B・ハリス教授の講義をもとにして、津守教授が協力してできた著書である。筆者はこれを読んでまことにいい本であると思った。両著者とも、筆者が知遇を得ている人であるので、筆者がほめることは、ある意味ではマイナスになるかもしれないと思った。しかし、これは筆者が待望していた以上の本であるので、あえて自らその紹介の筆をとることにした。

児童心理学については従来内外にたくさんの本がでていゝる。いずれも特長があり、よさがある。しかし、いろんな点で筆者は不足を感じていた。たとえば児童文化や児童文学のことが抜けているとか、もっぱらピアジェの発達心理学を中心にして―その点ではいい本であるが―編まれてい

て、その他の考え方やそれ以外の研究が取り上げてないとか、または児童心理学または児童教育学が教科として与えられている単位や時間数を気にして、問題の取り上げ方が、広いかたもあまりに表面をなでたぐらいで終わっているとか、身体発育や育児や臨床的な面だけに集中しているとかのものがあゝる。しかし筆者の求めていたものは、もし教科書として使うものであれば児童の身体的発育はもとよりのこと、知覚のこと、言語のこと、認知の発達のこと、児童文化のこと、文学のこと、知能のこと、感情のこと、親子関係やしつけのこと、一応は学生に概念的に与えておきたいものということであった。そうしないと、学生が児童について学んでいる基礎知識がどちらかに偏して、児童についてまんべんな知識や考え方の欠けてい

るのを、しばしば見いだしたからである。

その点この本は、まことに、あざやかな工作が行なわれている。しかも、これだけの材料をこのページの中によく盛りこんだものだと思う。これは、材料をこなし切っている熟練の人でなくては、なし得ないわざであろう。その上、これだけの材料をねり上げながら、どの部分もうわすべりになっていない。ちゃんと理論を示し、問題点を示している。

本書を書くのにあたって、著者がもっていた学問的態度がきわめていい。たとえば、今の時であるから、ピアジェの認知心理学は、十分にスペースを与えてあり、扱いはながら、全編を決して、ピアジェ一辺倒になっていない。これは全編を通読すればすぐに気づくことである。児童のモチベーションを説き、子どもの社会環境との関係をかなり忠実に考察し、また55ページで「子どもの世界は認知構造というよりもっと感情や想像の世界である」と主張している。

社会環境、技術革新、新しい価値観と児童の発達の関係の考察は、本書の特長の一つである。本書のあちこちで取り上げられ、読者に問題の考え方のポイントを示している。その取り上げ方がアメリカの生活を例として、アメリカ的

発想につらなることが多いが、その外国的発想の如何にかかわらず、我々に示唆するところが多い。「イデオット・ボックス」（自癡箱）といわれるテレビの問題まで言及している。ほんとに短い言及であるが、はつきりとその問題性を指摘している。多くの教科書がこういう生きた問題を素通りしているのに対して、ハリス教授は自分がたえず頭にもっている問題を、もち出すことを忘れない。

「児童研究の歴史」とくにその「米国における児童研究所設立の歴史」は、普通のこの種の著書では見られない得がたい資料である。これは、普通の学生にとっては、いわゆる児童心理学プロパーの領域ではないであろうが、研究者にとっては、まことにおもしろい読み物である。筆者は、アメリカの児童研究所の歴史について多少知っているつもりであったが、このようにきちんと整理してあるものを読んだのは、初めてであった。この資料はなるほど児童心理学プロパーの領域ではないにしても、児童心理学を学ぶ者にとっては、だれにとっても興味のある有益な読物であろう。

一番最後の章は「幼児教育理論のための心理学的基礎」という公開講演の翻訳であるが、この講演はハリス教授の幼児教育の哲学であろう。いままで、本書を初めから、読んできて、ここで、児童心理学が幼児教育をいかに指向す

べきか? を論じたものとして、読者はここでもう一度、読んできたことをふりかえって、自分の理論的思考をさせられたという、—まことに格好の終章である。

この講演はアメリカの一流の児童心理学者の一人が、ごく最近までの研究や議論を頭において、円熟した考察を行なっているもので、これはだれにとっても参考になるものであろう。ハリス教授の意見に同意するにしろ、しないにしろ、これはよく味読の価値がある。ただ、ここに盛られている資料的な研究は、非常に多いし、また複雑であるので、できれば、もつとゆっくりページをとって、研究のおもなものについての考察が読みたいものと思った。「発見学習」の語義があいまいで、不正確なことも指摘してある。ただこの講演の中で論じたことの要約が、26ページにあげられているが、この四カ条の表現が少し簡単にすぎて、多少はつきりしないのが残念である。ことに①と③の關係がどうなのか? ということである。もう少し表現がくわしくなれば、はつきりするであろう。③の内容、すなわち、「発達の初期のしげきが発達や学習の系列を促進させるかどうかはまだあきらかでないし、知的な過程や水準が結局あがるかどうかはまだ分かっていません」というところは、筆者のこの問題に対する考えと全く同一であって、筆者は

非常に気を強くしたものであった。

本書は、すでに述べたように、最後の講演などがあって、筆者の求めていた以上の児童心理学の本であるが、さらに欲をいわせてもらおうと、幼児の臨床的問題が加えられたら、さらに一層本書がまんべんなものになったらうと思う。ただし、なにぶんにも紙数の制限があったことと思うので、これを望むことはできなかつたのであろうかと思っている。筆者はどちらかというと、わりに遠慮しないで、ものをいう方であるが、本書については、この円熟した好書に敬意をあらうことで終始することになった。なお本書は教科書としてだけではない。普通の読物としても、心理学について、一応の知識があれば、充分に興味のある読物となるであらう。

最後に書名の問題であるが、筆者は本書を全く児童心理の教科書みたいに取扱ってしまったが、これは筆者のえがく児童心理学の理想像にあったからである。しかし著者たちは「児童発達教育学」とよんでいるが、これには問題もただ児童心理学的に限定しないで、むしろこの応用の上に教育を考えるという立場からであらうが、もちろんこの名称も結構であることはいうまでもない。

(小田原女子短期大学)